奈文研ニュース

No.81 June 2021

NABUNKEN NEWS

NARA NATIONAL RESEARCH INSTITUTE for CULTURAL PROPERTIES

独立行政法人　国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577　奈良市二条町2-9-1
https://www.nabunken.go.jp

所長就任にあたって

本中 眞 所長

松村恵司前所長の後任として、2021年４月１日付で奈良文化財研究所長に就任しました。

松村前所長が在任された約10年は、懸案であった本庁舎の新築・移転を完了し、国立文化財機構の機関としての施設が整った時期でした。また、全国の文化財関係報告書を電子情報化する全国遺跡報告総覧事業を奈文研の重要な事業に位置づけ、公開活用システムを開始することにより、文化財保護行政に資する研究機関としての奈文研の重要な役割を内外に示した時期でもありました。このような拠点的インフラの拡充期に、研究所運営の陣頭指揮にあたられた松村前所長のご労苦とご努力に対して、敬意を表するとともに深く感謝申し上げる次第です。

奈文研は、多様な文化財の宝庫である古都奈良において、実物にもとづく総合的な観点からの調査研究をおこない、その成果を文化財保護行政に反映させるために、文化庁の前身であった文化財保護委員会の附属機関として1952年に発足しました。

その後、時代の要請により組織は拡充と変貌を遂げ、現在は研究支援推進部、企画調整部、文化遺産部、都城発掘調査部、埋蔵文化財センター、飛鳥資料館からなる４部、１センター、１館の体制となっています。

これにくわえ、2020年からは国立文化財機構の中に文化財防災センターが開設され、その本部が奈文研庁舎内に置かれることとなりました。2011年の東日本大震災をはじめ、毎年のように発生する災害からどのように文化財を守り、地域コミュニティとの連携のもとに、どのように未然の措置を講ずることができるのかは喫緊の課題です。動産のみならず、建造物・遺跡等不動産の文化財の防災に対しても、センターの貢献が求められています。

奈文研は来年70周年の節目を迎えます。この機に社会の要請に見合った奈文研のあり方をみつめ、これまでの役割にも配慮しつつ、新たな目標に向けて組織の効率的な運営に努める前提として、次の３点をふまえることが重要だと考えています。

第一には、奈良の個性に根ざした研究機関としての役割を発揮することです。南都諸大寺と古代の都城関係遺跡の保存・活用に向けて、異なる分野の研究者が連携して調査に臨むという体制を維持し、文化財の実践的・総合的な調査研究を推進していきたいと考えています。

第二には、全国の文化財の保存・活用施策の発展のために、ナショナルセンターとしての役割を発揮することです。個々の文化財の価値に根差した保存・活用の理念・手法を地域コミュニティのひとりひとりが共有できるようにするために、研究の成果と情報を安全でわかりやすく社会に還元し、行政サービスの質を高める努力がさらに求められるものと考えています。

第三には、広く国際的な情報発信に努めていくことです。従来の中国・韓国等アジア諸国との研究交流事業については、今後とも関係機関との協力のもとに充実させていく必要があります。既登録の三つの世界文化遺産と一つの候補資産を含め、世界文化遺産の分野における奈良の経験と特質を活かし、文化財の保存・活用をめぐる国際的な情報共有にも貢献したいと考えています。

今後とも、皆様方の暖かいご支援とご協力を心よりお願い申し上げる次第です。　（所長　本中 眞）

発掘調査の概要

大官大寺南方の調査（飛鳥藤原第206次）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、2017年度以降、大官大寺と山田道にはさまれた地域の古代における土地利用状況を解明するために、継続的な試掘調査と地中レーダー探査を実施してきました。今回は、2019年度の調査区から100mほど南、大官大寺南門より南に約350mの地点に、藤原京東四坊坊間路の推定位置を横断するかたちで調査区を設定しました。調査期間は2021年１月13日から２月25日まで、調査面積は200㎡です。また、試掘調査地の南方・西方の約5,400㎡を対象として、地中レーダー探査を実施しました。結果は現在解析中です。

試掘調査の結果、東四坊坊間路の東西側溝に相当する南北溝を検出するにいたりませんでしたが、総柱建物１棟、南北棟建物１棟、南北塀２条、井戸１基、土坑２基を検出しました。土坑については時期不詳ですが、そのほかの遺構は７世紀後半から末に位置づけられます。

調査区の西側では比較的多くの遺構がみられました。西端部には総柱建物があり、東西３間分（約4.2m）、南北２間分（約2.8m）を検出しました。柱穴のうち３基には柱根が遺存しており、北壁にかかった西側柱の柱根を取り上げたところ、柱根の直下に据えられた直径10～30㎝程度の石を確認しました。これは、柱の沈下を防ぐ工夫（根固め）と考えられます。総柱建物の南側では、南壁沿いに東西に並ぶ２基の土坑の北端部分を検出しました。この東隣では、南北棟建物の北妻部分と考えられる柱穴３基の北半部分（梁行約3.0m）を検出しました。なお、土坑のうち東側の１基は、南北棟建物の西北隅柱柱穴に一部を壊されていました。南北棟建物の北側、調査区の北壁沿いには、井戸の底部南辺（幅約1.6m）がかかっていました。その埋土からは土師器の杯が出土しました。井戸の南側には、小振りの柱穴が東西に２基並んでおり、小型の井戸屋形が存在した可能性が考えられます。

遺構が認められなかった調査区中央をはさんで、調査区の東側では、約７mの間隔をあけて２本の南北塀が並行していました。西側の南北塀は柱穴３基を、東側の南北塀は柱穴４基を検出しています。調査区東端部では遺構を検出できませんでしたが、湿地由来の粗砂からなる自然堆積土が厚く堆積する状況を確認しました。自然堆積土からは、５世紀後半の埴輪片が出土しています。この堆積は西側に向かって傾斜し、これより上層は丁寧に整地されていました。

上記のほか、調査区西部では、整地土である暗褐色土直下に黒褐色土が局地的に広がり、ここから小型丸底土器２点や布留型甕の小片等、古墳時代前期の土師器が少量出土しました。

今回の調査により、調査地周辺がかつて湿地帯であり、７世紀になって本格的な整備がおこなわれるなかで、建物群が展開した様子があきらかになりました。藤原京の時期にかけて、土地利用が活発化した様子がうかがえます。

大官大寺南方を対象とした一連の調査は今回でひと区切りをむかえましたが、今後も周辺地域の調査を進め、藤原京造営期およびその前後を含む通時的な土地利用状況を解明していく予定です。

（都城発掘調査部　山藤 正敏）

調査区全景（南西から）

総柱建物西側柱の根固め石検出状況（南から）

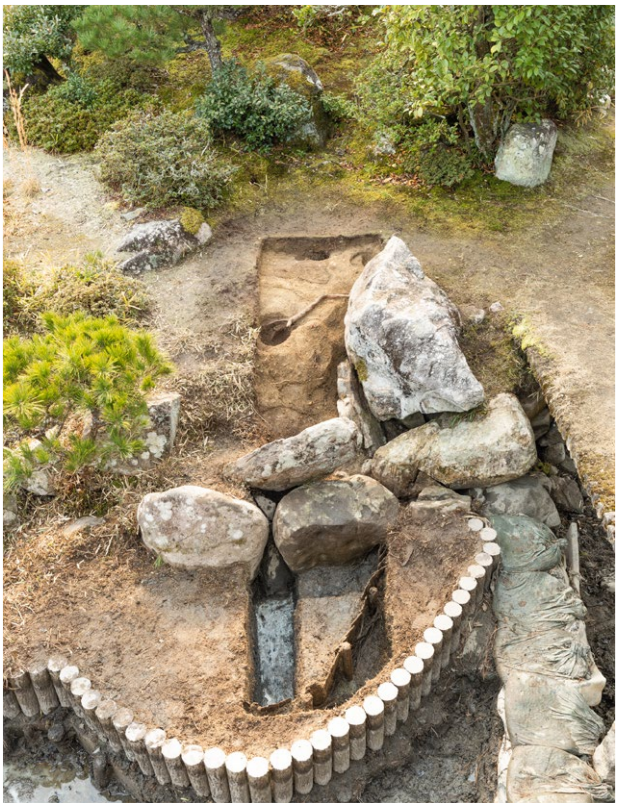
法華寺庭園の調査（平城第632次）

法華寺庭園は、法華寺客殿にともなう庭園です。奈文研ニュースNo.77でもお伝えしたように、本庭園は2019年度から保存整備事業の一環で発掘調査を実施しています。今年度は池北半部を対象に、傾いた築山景石の据え付け状況や池護岸の変遷を解明することを目的として調査をおこないました。

築山北面に設定した調査区（Aトレンチ）では、築山を造った造成土を検出しました。くわえて景石との間に空隙を確認したことから、景石の一部は原位置から動いていることがわかりました。また、現在の法華寺庭園を訪れる皆さんの目を楽しませているカキツバタが植えられている棚の変遷についても確認し、カキツバタの群生範囲が徐々に拡大していたことをあきらかにしました。

池北岸に設定した調査区（Bトレンチ）でも池の護岸の変遷を確認し、岸上では時期は不明ですが礫敷きによる舗装面を確認しました。

今回の調査を通じて、客殿側から庭園を眺める際に重要な要素となる景石が実は原位置をとどめておらず、池の護岸についても時期的な変化があったこと等がわかりました。これによって、今後の保存整備事業を進めるうえで重要な知見を得ることができました。　（都城発掘調査部　小田 裕樹）



Aトレンチ調査区全景（北から）

平城京左京二条二坊五坪の調査（平城第636次）

平城京左京二条二坊五坪は、南は二条大路に面し、平城宮東院の南に位置することから東院南方遺跡と呼ばれています。いわゆる二条大路木簡の内容から、当該地は藤原麻呂邸であった可能性が指摘されています。2021年３月に、建物建設にともない五坪の西南隅で45㎡の発掘調査を実施しました。その結果、予想どおり表土直下から多くの遺物と遺構を検出しました。地層の堆積も非常に良好で、３面の整地土上で合計８時期の遺構変遷を確認しました。最下層の南北塀は出土した軒瓦から天平期まで遡り、最上層の瓦溜は奈良時代後半期のものです。このうち５時期にわたり、溝や塀等の南北方向の遺構を確認しました。とりわけ南北掘立柱塀を５時期分６条検出したことから、本調査地点では、坪内を東西に区分するための遮蔽施設が繰り返し構築されたことがわかります。

その中間の４時期目では、その前後と全く異なる性質の遺構を検出しました。それは周囲に溝を巡らせて、一辺が１～２mの格子状の区画を造るいわゆる方形区画遺構と呼ばれるものです。近年の平城宮東院やコナベ古墳南方遺跡等の調査成果から、竈（かまど）に関わる遺構の可能性が指摘されています。このことから、当該地では南北方向の遮蔽施設が奈良時代を通じて繰り返し構築されていましたが、４時期目のみそうした区画ではなく、厨（くりや）の性格をもつ施設が広がっていたことが新たにわかりました。

（都城発掘調査部　国武 貞克）

奈良時代前半の南北掘立柱塀（写真右の柱列）

明治 34 年（1901）の標木　この標木建設が平城宮跡保存の最初の運動でした。

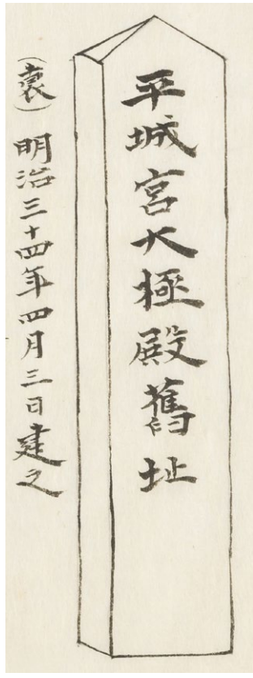
明治 43 年（1910）の標木　平城奠都 1200 年祭の時に立てられました。

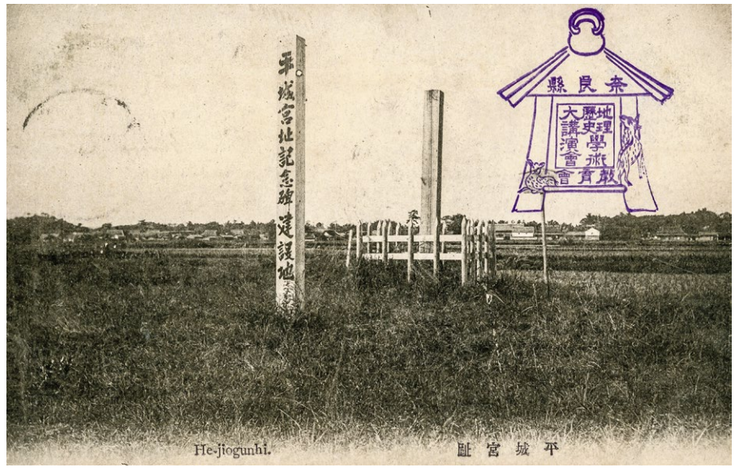
大極殿壇上に立てられた明治時代の標木

木の地肌にうっすらと文字が見えます。風雨にさらされて墨は消えてしまいましたが、墨の部分だけ風化が遅れて、木の地肌が段差になって盛り上がっているのです。

これは、明治時代に第二次大極殿の上に立てられた標木です。もともと２本だったのが、切断されて４点になっています。２本とも、もとは高さ３m近くあったと思います。昭和４年（1929）まで立っていました。これらは、平城宮跡保存に尽力された佐紀町の溝辺家に保管されていました。風雪に耐え、現在にまで伝わったこれらの柱は、明治時代の平城宮跡保存運動を物語ってくれます。

（文化遺産部　吉川 聡）





↑**第二次大極殿壇上の古写真葉書**（奈良県立図書情報館蔵）
大正２年（1913）以前に撮影されました。

←**明治 34 年標木建設時の見取図**（「平城宮大極殿旧址建標録」より抜粋）
都跡村元村長の子孫にあたる岡嶋家から近年発見された資料です。

『日韓文化財論集Ⅳ』の刊行

奈良文化財研究所では、韓国国立文化財研究所と1999年に共同研究協約書を締結して以来、共通した研究課題のもとで研究員を相互に派遣し、調査・研究を進めています。

今回、2016年度から実施してきた第４次共同研究「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」の成果をまとめた『日韓文化財論集Ⅳ』を刊行しました。この共同研究では、研究パートナーをつくり、お互いの調査に随行し、まさに寝食をともにしながら調査過程も共有することで、研究課題の着眼点や調査手法を相互に理解し、議論を深めながら、成果を蓄積してきました。

その結果、日韓古代の石工技術、日韓の古墳築造技術、金属器・土器・瓦の製作技法の比較、土器の付着物分析、木簡、都城制と寺院、伝統造景空間の比較等、総勢23名の研究員による12本の研究成果を収録した論文集となりました。

なお、本書は韓国でも同名で刊行されており、2008年度から数えて日韓各４冊、総８冊のシリーズとなりました。こうした積み重ねが相互理解を深め、研究のみならず、継続的な人的交流に着実につながっていると考えています。

この４月からは、新テーマのもとで新たな共同研究が始まりました。新型コロナウイルス感染症により、国内外の現地調査が大幅に制限された現在、どのように共同研究を進め、その成果を蓄積していけるのか、模索しながらのスタートとなりますが、５年後には、さらに多彩で、充実した研究成果を盛り込んだ『日韓文化財論集Ⅴ』の刊行をお知らせできればと思います。　（都城発掘調査部　松永 悦枝）

日韓両国で刊行された『日韓／韓日文化財論集』

「埋蔵文化財ニュース 184号」もう一つの特色

環境考古学研究室では、これまで遺跡の発掘調査報告書に掲載されている花粉分析データの集成を進めてきました。2021年３月末に刊行された「埋蔵文化財ニュース184号」は、花粉分析からみた都城造営と植生変化をテーマに、奈良県・滋賀県・京都府・大阪府の４府県域を特集したもので、各府県域を研究対象としている研究者にご寄稿いただきました。

中身としては専門的な内容ですが、埋蔵文化財担当者と環境考古学に興味のある学生へ向けてのメッセージとともに、長岡綾子氏（長岡デザイン）による美しいレイアウト・デザインによって、手に取りやすく親しみやすい冊子となっているのが、本号のもう一つの特色です。

表紙は、マツ属花粉の顕微鏡写真です。15コマの写真はそれぞれピントが異なっています。研究者はピントを少しずつ変えながら一つの花粉の形態を観察します。次頁にはプレパラートの写真があります。土から抽出した花粉は、このようにスライドガラスとカバーガラスの間に封入して観察します。じつは表紙から２・３頁までは花粉分析の一連の処理方法を遡るようなイメージになっています。また、４・５頁は同定の際に比較するためのさく葉標本と現生花粉標本で、奥付の頁は、分析で使う道具の一部を並べています。

試料の処理方法や道具類は研究者によって多少異なり、ここでは厳密に示していませんが、ふだん表に出ない部分についても、興味関心を持って読んでいただければ幸いです。

（埋蔵文化財センター　上中 央子）

埋蔵文化財ニュース184号（2・3頁と奥付頁）

『奈文研論叢』第2号の刊行

2019年度に創刊された『奈文研論叢』の第２号（Ａ４判　190頁）が、2021年３月22日に刊行されました。掲載論文・資料紹介は次の８本です。

［論文］

- 森川 実「土片埦から土片坏へ―土師器杯Cの法量変化からみた実用器種の変容について―」
- 庄田 慎矢・バンダリ スダルシャン・佐々木 由香・村上 夏希・劉 歆益「甘樫丘東麓遺跡出土コムギ炭化種子のユーラシア考古植物学的位置づけ」
- 山崎 健「上総国・下総国の貝類利用―地域における生業研究の一試論―」
- 神野 恵「平城京近郊窯の須恵器生産」
- TAMURA Tomomi, NAKAMURA Daisuke, and TRUONG Dac Chien “Chemical Analysis of Ancient Glass in Vietnam : A Comparative Study of Glass Beads Found in Vietnam and Japan”

［資料紹介］

- 村田 泰輔「藤原宮下層運河SD1901Aの層序」
- 橘 悠太「奈良文化財研究所所蔵『覚城院・萩原寺等関係中世聖教類』」
- 吉川 聡「興福寺二条家記録「文亀三年引付」の紹介」

本号でも、奈文研でおこなわれている研究が多岐にわたることを反映して、多様な分野・内容の論文、資料紹介を掲載することができました。また、田村朋美ほかによる英文論文を載せることができました。今後は、こうした外国語による論文も積極的に掲載し、奈文研での研究成果を国内ばかりでなく、国外に向けても発信していこうと考えています。平城宮跡資料館、六一書房（https://www.book61.co.jp）で発売中です。　（企画調整部　加藤 真二）

刊行された『奈文研論叢』第２号

『探検！奈文研』の刊行

「探検！奈文研」は、奈文研が創立60周年を迎えた2012年に、奈文研の調査・研究活動をわかりやすく紹介するために読売新聞奈良版の連載企画としてスタートした読み物です。

2013年４月からは「小・中学生の読者が親子で楽しめるように」というコンセプトのもと、毎回一つのテーマを短い文章と一枚の写真またはイラストを添えて紹介する定期連載となりました。この連載が好評を博し、2018年９月までの５年半近くにわたり続きました。この度、全205話を収録し、一冊の書籍として刊行いたしました。

書籍化にあたっては連載当時の雰囲気を活かしつつ、一部の写真をリニューアルする等読者の皆さんが読みやすくなるような工夫をくわえています。

本書の編集作業を進める中で、与えられたテーマを約500字という限られた文字数の中で簡潔にわかりやすく、それでいて内容が正確に伝わるように書くことに頭を悩ませた連載当時の記憶を思い出しました。しかしすべての頁を通読してみると、奈文研の調査・研究の多彩さと継続的な成果の蓄積の豊かさをあらためて実感することができました。私たちの調査・研究の成果をいかに広く知っていただくか、その方法を模索することも大切で、苦労した思い出も良い修練になったと感じています。

本書は奈文研の様々な調査・研究の成果のエッセンスが詰まった一冊です。平城宮跡資料館、飛鳥資料館、六一書房（https://www.book61.co.jp）で発売しています。ぜひ皆さんも本書を手にとって、奈文研の調査・研究の奥深き世界を探検してみてください！

（都城発掘調査部　小田 裕樹・山本 祥隆・山崎 有生）

刊行された『探検！奈文研』

飛鳥資料館　第12回写真コンテスト　「飛鳥の木」

今年もコロナウィルスの感染拡大防止のため、密を避けた行動が求められています。いっぽうで、飛鳥の自然はいつもと変わらず季節とともにその姿を刻々と変化させています。そこで今回は、飛鳥の自然を代表する風物の一つである「木」をテーマに、写真コンテストを開催します。

明日香村は、村面積の約65％を森林が占めています。甘樫丘、栢森、真弓等の木の名前のついた地名や、槻木の広場や両槻宮等の『日本書紀』に登場する名称からは、飛鳥の木と歴史のつながりを感じます。

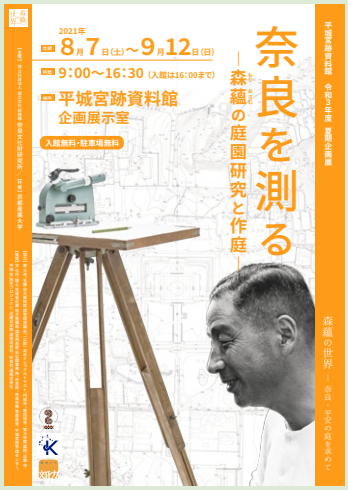
今では、村に生える木々は、その大半がスギやヒノキの植林となっていますが、少し前にはクヌギ等の広葉樹の森が広がっていました。扇状地の地形を生かした果樹園、薪炭の材料になった樹木。飛鳥の木は、飛鳥の人々の暮らしとも繋がってきました。

遺跡のかたわらに、集落のまわりに、古寺の境内に、すっくと生えた飛鳥の木。第12回写真コンテストでは、「木を題材とし、自然と人々の営みが一体となった飛鳥の魅力が伝わる写真」をテーマに作品を募集・展示します。

（都城発掘調査部　西田 紀子／飛鳥資料館　石田 由紀子）

応募締切：2021年６月30日（水）必着　展示期間：2021年７月16日（金）～９月12日（日）
来館者投票期間：2021年７月16日（金）～８月29日（日）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）／休館日：月曜日（月曜が休日の場合は翌平日）
※８月９日（月）は開館、８月10日（火）は休館
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/asuka/　お問合せ：☎0744-54-3561

平城宮跡資料館 夏期企画展「奈良を測る ―森蘊の庭園研究と作庭―」



森蘊（もり・おさむ）は、奈良文化財研究所の初代建造物研究室長を務めた庭園史家・作庭家です。地形実測にもとづいてかつての空間を復元的に考察するという、歴史地理学的な手法を庭園研究に援用し、その研究の進展に大きく貢献しました。また、長い年月のうちに遺跡と化した庭園の発掘調査から復元整備までを手掛け、文化財庭園の修復・整備の方法論の礎を築きました。さらに、これらの調査研究の経験からの発想による作庭活動もおこなっており、奈良をはじめ各地にその作例が残っています。

奈良文化財研究所では、森が奈文研に在籍した当時の図面等の研究資料を所蔵しています。この度、資料の整理が一段落したことを受け、これらのうち、奈良所在の遺跡・庭園に関する資料を中心に展示をおこない、森蘊の庭園研究と作庭に関する業績を紹介いたします。

（文化遺産部　高橋 知奈津）

主催：奈良文化財研究所 ／共催：京都産業大学
会期：2021年８月７日（土）～９月12日（日）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）／休館日：月曜日（月曜が休日の場合は翌平日）
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/　お問合せ：☎0742-30-6753（連携推進課）

■　記　録

文化財担当者研修

○古文書歴史資料調査基礎課程
　５月31日（月）～６月４日（金）　10名
○土器・陶磁器調査過程
　６月14日（月）～６月18日（金）　10名
○建築遺構調査課程
　６月21日（月）～６月25日（金）　８名

第126回公開講演会　オンライン配信
　６月25日（金）12：00～６月28日（月）12：00

飛鳥資料館　ミニ展示
　４月23日（金）～５月16日（日）　535名
　「新収蔵品紹介 ―「呉」と書かれた瓦―」

※「新型コロナウイルス感染症　奈良県緊急対処措置」にもとづき、下記施設を臨時休館・閉室いたしました。（５月２日（日）～６月20日（日））
　飛鳥資料館
　平城宮跡資料館
　藤原宮跡資料室
　本庁舎図書資料室

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　https://www.nabunken.go.jp
Ｅメール　koho_nabunken@nich.go.jp
発行年月　2021年6月